

黎明紙第7号御研鑽

御生誕祭を迎えて

来る十一月一十三日には、私共にとりまして、待望の最も意義深い御生誕祭を迎えていたたくわけであります。

明主様は、明治十五年（一八八二年）に、御生誕になられましたので、今年は八八回目の御生誕の日にあたるわけであります。

「明主様への純粹なる信仰をつらぬかせていただくため」

「明主様の御教えに基づく信仰を守らせていただくため」に新し

い第一歩をふみ出させていただきて居ります私共にとりまして、今年の御生誕祭は今までにもまして、深い感謝と喜びをもって迎えさせていたたくわけであります。

現在、世間一般の多くの方々は、御生誕祭と申し上げても、ただある一つの宗教の教祖の御誕生日ぐらいにしか考えて居られないかも知れません。勿論、私共が御生誕祭のもつ本当に深い意義を掴ませていただくのは、中々容易なことではありません。私共が身魂を磨き、向上させて

いただいてはじめて、身魂相応に覚らせていただけるわけであります。

(地36)

しかし、私共の場合、いやしくも御生誕祭の意義を、単に私共が信仰させていただいている一宗教の教祖の御誕生日、或は自分の病気を救つて下さった有難い方の御誕生日であるというような表面的な考え方のみとどまつていては申し訳ないと思います。

已に何回か申上げてまいりましたが、今一度、明主様がこの現界にお顕われ下さった意味を研鑽させていただき、私共は、正しいしつかりとした心構えをもつて、来るべき御生誕祭をお迎えさせていただいたいとります。

万物の創造者であり、且つ主宰者であられる主神の御目的である理想世界・地上天国実現の段階に愈々入つてきているわけであります、このことについて明主様は次の様にお説き下さつて居ります。

『先ず知らねばならない肝腎な事は、旧文明は悪の力が支配的であつて善の力は甚だ微弱であつた事である。處が愈々時期来つて今度は逆となり、茲に世界は地上天国実現の段階に入るのである。然

し之に就いては重大問題がある。というのは旧文明は当然清算されなければならぬが、何しろ世界は長い間の惡の堆積による罪穢の解消こそ問題で、之が世界的大淨化作用である。従つて之による犠牲者の数は如何に大量に上るかは、到底想像もつかない程である。勿論之こそ最後の審判であつて、亦止む事を得ないが、神の大愛は一人でも多くの人間を救わんとして私という者を選び給い、其の大業を行わせられるのであつて、其の序曲というべきものが本著であるから、此の事を十分肝に銘じて読まれたいのである。

そうして右の如く最後の審判が終るや、愈々新世界建設の運びになるのであるが、其の転換期に於ける凡ゆる文化の切換えこそ、空前絶後の大変動であつて、到底人間の想像だも不可能である。勿論旧文明中の誤謬のは是正を第一とし、新文明構想の指針を与えるものである。それをしてから詳しく述べるのであるが、勿論之を読む人々こそ、救いの綱を目の前に下されたと同様で、直に之を掴めば救われるが、そうでない人は後に到つて悔を残るのは勿論で、時已に遅し

である。以上の如く罪深き者は亡び、罪浅き者は救われて、将来に於ける地上天国の住民となり得るのである』

神様は、地上天国を実現されるにあたり、先ず今迄の惡の堆積による罪穢の解消をなさり、善と惡を立分けられるわけであります。しかし、このままでは、如何に多数の犠牲者が出来るか、計り知れないほど私共は多くの罪穢を持つてゐるわけであります。

この私共を一人でも多く救つて下さらんとする神様の大愛の発露として、明主様がこの世に救世主としてお顯れ下さつたのであります。

『愈々天の時来つて絶対力を与えられ、其の行使による人類救済の大使命を帯びて出顕したのが私である以上、私によつて真理の深奥を説き、人類最後の救いを実行』されるのであります。

明主様こそ、主神から、その直接的な救いの御力と、御教えをゆだねられ、私共を救うためにお出ましになられた救い主であります。と同時に、明主様は、私共のすべての苦しみのもとである罪を許す権能を、主神より託され出頭された方であります。（教9・14）

『一人でも多くの人間を救い給うのが神の大愛である以上、大審判の執行者であり、人間の生命を握られ給うのであるから、神の御手に縋つて罪を許されるより外に此の難関を切り抜ける方法は絶対ないのである。即ち人類が負える罪の重荷を神の御手によつて取除かれ清められる以外救われる道はないからである。私はこの最後の救いの執行者として、神の委任のままに責任を遂行すべく茲に一大警鐘を鳴らすのである』（栄42）とお説きいただいた居ります。

明主様を救世主として仰ぎ、明主様がなげかけて下さつた救いの綱である御教えと御力につかまらせていいただき、私共の祖先以来の数限りない罪を心より悔改めお許しをいたいた時に、『永遠の生命』を賜わることが出来るのであります。

『罪の中でも、意識的に行う罪と無意識に知らず識らず行う罪と両方ある。それで意識的に行う罪は非常に重いのです、それは現界の法律と同じです、知らず識らず行う罪は悔悟して御詫びをすれば

許されるものです。（中略）気が附いて御詫して、今度は別の本当の働きをすれば許されるのです。けれども罪は罪ですから、やはり相当の代償がなくては許されないのです。』（教14・62）と御

垂示賜わつて居りますように、私共は、罪のお詫びをさせていただくと共に、今度は神様より与えていただいた本当の働き、神様の御用をさせていただくことによつて、お救いいただけるのであります。

『今度罪を消されないと永遠に残るのです。それは軽い罪は昼間になると消えますが、しかし軽い罪の人は殆んどないので、みんな重い罪の人です。丁度あなた方が淨靈して、幾らでも毒があるようなもので、チットやソットのものではないのです。』（教33・

9）とお説きいただきて居りますように、私共の罪穢・曇りの量は想像を絶するものであります。それにも拘らず、私共が日々お許しいただいているささやかな御用・御奉仕によつて、如何に大きな御救いをいただいているかを考えます時、神様の大愛の御心に何とお応え申上げてよいか、なすすべを見出すことが出来ないのであります。

『審判を無事に切り抜け得る人間を、一人でも多く作るのが目的で、之が神の大愛であり、私に課せられた大使命もある。其の唯一の方法としての淨靈であるから、淨靈とは独り病氣を治すのみではない。来るべき審判を無事に切り抜け得る資格者を作るのである』

(叢III)

淨靈には、私共の罪を許し、私共を永遠にお救い下さらんとする神様の御心がこめられているわけであり、その御力を世の中の人々にお取次ぎするお許しまでも、私共は、いただいているわけであります。

明主様が説かれました御教えは、『主神直接の啓示』によるものであります。先にもお取次ぎいたしましたように、神様が、『一人でも多くの人間を救わん』がために、明主様を通じて、真理の深奥を示された御救いのお言葉が御神書であります。

地上天国建設という重大な使命をもたれた明主様は『神と密接不離な関係』においてになり、『主神の真意を感得され』て一切の根本を示されたのが、御神書であります。

明主様は、かつて『結局人を救うには、人ばかりでなく靈にしろ一切を救うには、光なのです、いろんな靈というものは光を求めて来るのです。光をいただきたい、御光をいただきたいと言つて求めて来るのでです。光で救われるのです』（教33・34）と仰しやられました。罪深き私共は、救い主・明主様の御光りによつてはじめて救つていただけるのであります。

明主様を「救い主」として仰ぎ、御教えに示された道を守り、罪穢を中心より悔改め、正しく御用をさせていただいた時に、私共は明主様の御光りにつつまれて本当にお救いいただけるのであります。

到底お救いいただけるとは考えようもない位の多くの罪穢をもつ私共を、一人でも多くお許し下さり、永遠の御救いを下さらんがために、救い主・明主様は御出顕になられたのであります。私共は御生誕祭を迎させさせていただくにあたつて、この神様の大愛の御心に、心より感謝のお祈りを捧げさせていただくと共に、一日も早く世の中の人々に正しく救い主・明主様の御出頭をお伝えし、この神様の御心にお応えさせていただくことを、お誓い申上げたいと思います。